

保育者が知っておきたい 子どもの歯と口の病気

—その対応と予防—

近頃、むし歯がいっぱいあるという子どもが少なくなっているように思える。これは社会全体での、むし歯予防に対する取り組みによるものであろう。しかし、著者は3歳から5歳にかけてむし歯の有病率が著しく増加しているところに注目し、その要因の一つに保育環境に格差があることを指摘している。

本書は、保育者に「気付きの目」で「適切な対応」を行い、子どもの健康と安全を守ってもらうために、子どもの歯と口の健康づくりを進める上での正しい知識と考え方について執筆されたものである。我々歯科医師にとっても、本書は小さい子どもを持つ患者や保育関係者とのコミュニケーションツールとして大いに活用できるだろう。

内容としては、これからの子どもの歯と口

の健康を守るために、むし歯予防だけではなく、口の機能や食育の推進など、保育者が色々な面に目を向けて知っておくべきこととして、「保育とむし歯」「むし歯予防」「口腔の機能」「歯科から見た食育の推進」「子どもの虐待と歯科」「現場でおきやすい事故とその対応」「保育者が知ってほしい歯や口の病気14」の7つの項目に分け、多くの写真やイラストを用いて分かりやすく解説されている。

また、色々な場面での保護者へのアドバイス、施設での対応、予防のポイントなどについても簡潔にまとめて記載されており、最後は「保育者が少しでも不安を取り除き、育児の楽しみを実感してもらいたい」と結んでいる。

余談だが、本書に掲載されているほのぼのとした優しいイラストも、歯科医師によって描かれたものである。(馬場宏治)

(日歯広報2014年2月5日第1613号書評より)